

氏名（本籍地）	BAHMAN ZAKIPOUR（イラン）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第404号（甲文第48号）		
学位記授与の日付	平成29年3月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当		
学位論文題目	井筒俊彦の思想における比較哲学の意義 — 神的なものと社会的なものとの間の争議 —		
論文審査委員	主査 教授	博士（学術）	河本英夫
	副査 教授		長島隆
	副査 教授		相楽勉
	副査 教授	博士（文学）	永井晋
	副査 本学非常勤講師		小野純一

## 【論文の概要】

### 論文の特徴

本論文の中心的な課題は、井筒俊彦の比較哲学と政治的・社会的な事柄との関係の解明です。課題設定のところで、すでに斬新な切り口を設定しているのです。従来井筒俊彦については、イスラム神秘主義を中心とした宗教思想家としての面を論じるものがほとんどでしたが、この論文ではイスラム・イランの社会・政治史のなかでの井筒俊彦の比較哲学・比較思想の形成と推移を論じるものです。井筒俊彦の著作の中で現象学、言語学、イスラム学の分野で論じられてきた材料をこなしながら、同時にそれらのなかに別の側面としてみられる社会的、政治的関係を扱うものになっています。その意味で、これまで意識的あるいは無意識的に言及されることのなかった位相を言語化することが、筆者がみずから課した課題であることとなります。

視点は、フーコの知の権力論に似ており、知はそれとして一つの社会的力でもある、という事態にかかわる、イスラム・シーア派の物語を形成して見せることにあります。その意味で果敢で挑戦的な論述にもなっています。このことが実行できるためには、イスラム・シーア派についての多くの宗教家の思想を歴史的におさえ、また現代のイランの研究者たちの見解をおさえおかなければなりません。この論文は、比較哲学の本質について、井筒俊彦にアラビア語を教えたジャールラーの反シーア派的な見解、井筒俊彦と井筒の同僚のコルバンによる世俗主義とニヒリズム批判、反対のオリエンタリズムと井筒の思想と

の関係、イラン革命と井筒の認識論的問題等に言及し、井筒が直面した知の課題領域を明らかにしながら、井筒俊彦の宗教思想を論じていくという構成の仕方を取っています。

井筒俊彦が「比較哲学」あるいは「東洋哲学」と呼ぶのは、実際に、東洋人のアイデンティティー、西洋史の支配、東西の関係、伝統とモダニティーの関係などのような問題を含んでいます。それは思想そのものが同時に帯びてしまう気質、体質にかかわっていることを意味します。「精神的東洋」や「万国の東洋は、団結せよ」のような発想は、イスラム思想のなかでは、特異な位置を占めることが明らかにされていきます。

本論文のもう一つの特徴は、公刊された書物だけではなく、現在イランで生存している井筒俊彦の同僚であったり、井筒俊彦の教え子だった人に、実際にインタビューを行い、フィールド的なデータを採っていることです。ことにシャイガン、ナスル、モハッゲグ、アーヴァーニー等々からインタビューができたことは大きく、現代イスラム・イラン史に新しいテキストを提供することになったと考えられます。これは日本の研究者にはできないことです。また未公開資料を収集し、資料の発掘も行っています。なによりも現在の日本のイスラム研究では、視野に入っていない多くの現在のイランの思想家、哲学者を取り上げ、ホメイニ革命以降のイランの思想動向を明らかにしていくことになります。

## 論文の構成

論文は3部構成になっており、第一部では比較思想の誕生から、比較思想の課題までを、事柄に即して明らかにしていく議論です。また第二部は、井筒俊彦の比較哲学・比較思想の方法的な変遷が扱われており、当初語学の教員であった井筒俊彦が、思想詩人となり、それによって特異な主張を展開するようになる経緯と系譜が扱われています。第三部は、1970年代ぐらいからイスラム圏ではっきりしてくる、オリエンタリズムに対する反対のオリエンタリズムのさまざまな議論に井筒俊彦の比較思想は、どう切り結んでいくのかが明らかにされていきます。

第一部では、比較思想や比較哲学が何を行っているのかの検討が行われますが、そのさいに二つの事例が取り上げられています。一つの例は前近代に属し、ダーラー・ショクーの『両海的一致』と『ウパニシャッド』のペルシャ語訳についてであり、もう一つの例は、近代に属し、マッソン・ウルセルの『比較哲学』についてです。マッソン・ウルセルの『比較哲学』は、比較哲学概論と呼ぶべきもので、比較哲学の課題から原理までを論じた著作です。第一部の議論全体は、比較哲学の誕生から記述を開始して、現在までどのような比較哲学が行われたのかが論じられていきます。このウルセルの議論が、井筒の当初の比較哲学のモデルとなっていることを明らかにしていきます。

比較哲学の行う作業として、著者はこれまでの著作から抽出して、5つの原理を設定しています。それは以下のようなものです。

- 1) 比較哲学は、諸文化の相互関係における歴史的事実の「理解」と「表現」を提示する。例えば、トマス・アクィナスの哲学とイブン・スィーナーの哲学とを比較することで、両者の哲学の「理解」と両者の類似性と差異性の「表現」に加え、ギリシア哲学、イスラム哲学、キリスト教哲学の歴史的な関係をも示すことができる。
- 2) 比較哲学は、全ての思想を包括するような普遍史ないし世界思想史を鳥瞰的に叙述する。このことについて、マッソン・ウルセルの『比較哲学』の最後にある網羅的な哲学比較年表が、具体例として挙げられます。
- 3) 比較哲学は、価値観や世界観の対立に起因する現実世界の困難な諸問題を解決するための手がかりを与える。
- 4) 比較哲学は、自らの哲学を構築するための手がかりを与える。つまり、自らの哲学を他の哲学や学派と比較し、その哲学や学派を解説や批判しつつ、自己の哲学の特徴や特質を「表現」する。
- 5) 比較哲学は、絶対主義の水準を超え、ある種の相対主義や多元主義に向かう。というのも、相対主義や多元主義によって様々な思想や宗教の概念を比較することができる。

これらのごく一般化可能な比較哲学の方針設定に加えて、筆者は、6番目の規定を加えていきます。それは以下のようなものです。

一方のA文明のすべての次元が、他方のB文明の「中心」に入り込んで、B文明の政治的・社会的な状態を大きく変化させる場合に、比較哲学の誕生が必然的であるということである。ここで筆者が「中心」という言葉で意図しているのは、その文明を特徴づけている思想のことであり、そのような思想は、技術的に実現されるものも含み、またイスラムやヒンドゥー教におけるように、宗教的文脈の中で哲学的思考として展開されているものである。これが6番目の規定になります。

この6番目の規定が、文明の衝突のなかでの比較哲学の不可避性と、比較哲学そのものが誕生時にもつ政治性を特徴づけていることになります。しかも同時に、比較哲学は、発見した解決方法を政治的・社会的な水準で実行するにしても、発見された解決方法が必然的に、政治的・社会的にポジティブな結果に至るということにはならないという制約が付きまきます。そしてこうした事態を、論文全体で論じ、明らかにしていくことになります。

第二部では、井筒の比較思想の内実を分析的に考察しています。ことに比較の方法という点では、井筒俊彦に時代的に大きな変化があることを明らかにしていきます。方法論の観点から井筒の著作を三つのグループで捉えることができるとしています。第一のグループは、おもに1937-1966年まで井筒俊彦が書いた著作が含まれています。これらの著作の主題と内容は、言語に関する研究とイスラム思想史、イスラム神学、『コーラン』の和訳、

および、『コーラン』の諸概念と意味に関する研究、近代ロシア文学史、古代ギリシア思想史です。

もともと井筒俊彦は、英文学の出身であり、語学あるいは文学の教員だったのです。この時期の比較思想は、基本的に言語ごとの文化相対主義という枠内で議論されています。井筒は、たとえば人間の社会における普遍的な道德律の存在を否定しないのですが、しかしこれらの全般的な道德律は単に「抽象的思惟の段階」において得られるものであると考えています。そのため、この時期の井筒俊彦は自分の客観的アプローチに基づいて、「人間生活の具体的現実」に力点を置いたのです。すなわち、特定の社会における言語的現実と、「人間生活の具体的現実」の間の論理的な関係を描き出すことになったのです。これが井筒俊彦の第一期の比較思想の方法の特質です。基本的にはサピア＝ウォーフの言語的相対主義と類似したものです。

井筒俊彦の比較思想の第二のグループは、おもに、1966-1979年までの著作です。1966年から井筒は、コルバンの影響の下に、『スーフイズムとタオイイズム』を書くことによって、本格的に比較哲学にとりかかり始めることになります。ここではウルセルが提案する方法論が全面的に活用され、キータームの取出しと、構造的な対比が行われます。たとえば二つの概念やキータームを等しい水準に置き、いずれの間にも構造的対比の等式が成立するように操作するものです。ベルクソンにおける西洋哲学の「純粹体験」は、西田における日本哲学の「純粹体験」と等しいという対比の等式を成立させることになります。

これは構造対応とでも呼ぶべきもので、キータームのなかには普遍性をもつものが含まれるので、一対一写像のような対応にはならないのですが、総体として配置の類似（相同）が明らかにされることになります。分類学で見られる、鳥の羽と人間の手を構造的配置の対応関係であつかうような比較思想の方法が、この時期のもので、このやり方は、論証的には類推のようなところが残るのですが、それぞれの対比項目で発見があるような組み立てになります。

井筒俊彦は『スーフイズムとタオイイズム』の中で、イブン・アラビー学派のキータームである「存在」と道教のキータームである「道」とを、それらの形而上学の構造の下に対比し比較することを試みるのです。存在と道は、個々の事物を超えて、しかも個々の事物につねに寄り添うように付きまとうという共通の特性の点で、対比項となり、それによって比較すべき構造を見出していくという仕組みになります。

さらに第三期では井筒の比較思想にまったく別の構造対応の仕組みが出てきます。井筒は、これによって自分の東洋哲学（＝比較哲学）の構造と基本的枠組みについてさらに反省的に考えをすすめたことになるのです。この時期の井筒は、ナスル、モハッゲグ、ランドルト、とくにコルバンの影響下に、次第に言語学の研究から離れ、コルバンと共にイブン・ルシュド以後のイスラム哲学の再評価を行うこと、そして比較哲学を作ることになっ

たと、描かれていきます。これらが、『意識と本質』で描かれるような、はっきりとした神秘主義的な体験の構造を示すものとなるのです。

ここにはいくつかのヨーロッパ哲学への克服も含まれています。一つは人間である現存在を、死へと向かうものだとするのではなく、死の向こうへと向かうものだとする点で、当初より現存在は永遠と関係づけられていきます。そして存在を神学的に解釈し、絶対存在、純粹存在、絶対無分節等々の哲学の用語へと作り変えていくのです。そのため存在が固有に自存化していくこととなります。存在者の存在ではなく、自存する存在というところに進みます。ここから存在の優先性が生じ、たとえば「花が存在する」という言明は、本来的には「存在が花する」という仕組みになります。存在が花として顕現するという言語的な定式化が出てくるのです。

そうしたもろもろの改変を経たうえで、井筒俊彦は、ある種の神秘体験を含む意識の表層から深層へと至る経験の変化をモデル化していくこととなります。共通の構造的な宗教体験の仕組みを取り出すという点で、これが第三の方法になります。下敷きになっているのは、スフラワルディーの哲学とそれを解釈したコルバンの議論であることとなります。

神秘哲学者たちは、宇宙において隠れた真理の实在に到達することを求めるのですが、その真理は人間の感覚器官では知覚できないこととなります。その真理に到達する道は修行であることとなります。修行によって神秘主義者の心に徐々に変化が生じ、隠れた实在はその本源的な姿を神秘主義者の心の中で開示するのです。神秘主義者が無媒介的に实在を把握した後、この把握されたものは、一般的に神話的な形象によって表現されることとなります。

井筒俊彦は、スフラワルディーを参照しながら、「形象的相似世界」を「質料性（あるいは経験的事実性）を離脱した似姿の世界」とも呼びます。「想像的」イマージュは、「分離された想像」における事物の元型的パターンになります。井筒は『意識と本質』の中で、東洋哲学に共通の構造を導入しようと企て、東洋の諸哲学から一つのモデルを構築します。そのモデルが、「分節化Ⅰ→絶対無分節→分節化Ⅱ」の経過を辿る意識の深化と覚醒の過程であることとなります。こうした図式は、図式の特長として、分節Ⅰから絶対無分節、分節Ⅱを何度も通過するだけでは、分節Ⅰと分節Ⅱの間で形成される日常生活感覚のネットワークが語られることもなく、おのずと通り過ぎられてしまうこと、つまり個々の経験の蓄積が語られないままになること、すなわち絶対無分節は、構造的な仕組みの上で過度に永遠化されること、さらに純粹存在、絶対無分節、光の光は、修行を経たり、現象学的還元を経なくても、構造的な配置として、つまりある種の先験的な意味として理解されることとなります。これによって比較哲学に固有の同時代的な問題関心や認識の利害関心が、どこかでこうした図式やその意味とすれ違ってしまおうという事態になることとなります。

これらを受けて第三部では、イスラムの宗教思想をめぐる二つの社会的、政治的課題が論じられています。ひとつはイスラム文化圏のなかから出現した「反対のオリエンタリズム」であり、もう一つは伝統と超歴史性の問題にかかわります。

反対のオリエンタリズムは、サイードの『オリエンタリズム』への反論の意味を込めて、イスラム文化圏のなかから出現し、広範に共有された思想動向です。東洋人たちは「オリエンタリズムの言説」を超え、東洋の復興ために、ある種の「反対の言説」によって新たな「東洋人」を作り出してしまふこととなります。ここにはある種の逆説が出現します。相対的配置を脱して、みずからの固有性を打ち出そうとする思想動向が、却って対応勢力としてみずからを配置するという仕組みです。つまり反対を唱えることが、図式そのものを強化するという仕組みです。

サイード自身が『オリエンタリズム』を出版するに先立って、オリエンタリズムに対する「反対の言説」は、実は様々な国で生まれていました。アブドゥル＝ナセルによるアラブ民族主義の出現、ハサン・アル＝バンナーによるムスリム同胞団の出現、サイイド・クトゥブによるイスラム原理主義の出現等々がありました。こうした動向のなかで、最も重要で最も影響を及ぼしたものが、シリア人の哲学者であるアル＝アズムの「オリエンタリズムと反対のオリエンタリズム」という論文です。

コルバンと井筒の比較哲学においても、反対のオリエンタリズムの哲学的な水準において、具体的にはアイデンティティと伝統の復興、および、西洋文明に精神性を与えることが目標となります。コルバンと井筒の比較哲学における現象学の方法論は、東洋のすべての伝統も歴史的出来事も、あるいは事象の全てを、共通の形而上学的構造である精神的な領域（精神的東洋）と還元してしまうことになるのです。ここに「本質還元主義」が出現し、歴史的な事象、社会的な事象に対して、あらゆる場面で発言可能でありながら、ことごとくすれ違っていくという仕組みが出現してしまうこととなります。

また井筒は、コルバンと同様に、創造的想像性の領域へと進むことを課題とし、そのことを何度も訴えることで、超歴史性へと向かう傾向を強めていきます。そのことによって現状の個々の歴史的課題を永遠へと向けて超え出ていくように見えながら、まさにそれによって歴史的、社会的な事象とすれ違ってしまふという仕組みを作り出してしまったと述べられていきます。歴史の運動が「終末の日」に至るとき、不在イマームがみずからの姿をあらわし、世俗的領域が創造的想像界において「現前」してしまったとき、実は井筒俊彦の比較哲学も終焉に至ることとなります。あらゆる事象を永遠へと還元することは、一種の終末論・千年王国論のかたちを取り、予言された終末がまさにこないことによってはじめて維持されるという仕組みが出現してきます。

最も簡潔に言えば、井筒俊彦の思想は、最終段階で、世俗対神聖、歴史的なものとの永遠のもの、外面的なものとの内的なもの等々の過度に明確化された二元論に到り、こうした

二分法の一方は、神聖、永遠なもの、内面的なもののように無限性をもち、もう一方は有限なものであるように、「非対称的な二分法」になります。一方は有限で、他方は無限であるために、無限の内容は決まらず、カテゴリーの階層が異なるものを二分法で対比的に扱うというカテゴリーミステイクが行われてしまっていることになります。そのため自分自身を無限の側に仮託し、際限なく自己正当化ができ、かつ有限なものに対してつねに通り過ぎてしまう仕組みとなってしまう。この非対称的二分法のもとに、社会的、政治的、歴史的出来事を扱おうとすると、ことごとくすれ違ってしまいうという事態に陥ることになると論じます。振り返ってみれば、非対称的二分法は、分節されたもの／絶対無分節、存在者／存在、現れ／光の光等々の場面でもすでにみられており、これらはある意味で同じようにカテゴリーミステイクであり、無限や無際限の側にみずからを仮託すれば、それによってそれじたいデオロギーになってしまうことが明らかにされるのです。

## 評価

論文の作りの特徴としては、(1) 比較思想の歴史を丹念に追跡し、ヨーロッパや日本の文献ではほとんど描かれることのない多くのイスラムの比較思想家を配置して論じることに成功していること、それによって比較思想の歴史を描くことに成功していること、(2) 現在なお生存している井筒俊彦のイランでの共同研究者や教え子にインタビューを試み、公刊された論文や著作とは別に丹念にデータを収集していること、(3) 比較思想が本質還元主義のような固有の局面に到ると、社会や歴史に対して、独特の「構造的すれ違い」を引き起こしてしまうことが明るみに出されていること等です。

この論文によって、フーコが知の権力論でのべていた事態に、新たな項目を加えることになり、比較哲学や比較思想に新たな課題を提起したことになります。フーコの知の権力論は、フランシス・ベーコンの「知は力なり」の一つの派生形態ですが、それを比較思想の系譜という一貫したパースペクティヴのもとに描くことに成功したという点で、十分に博士論文として評価できると考えています。また、文学研究科（哲学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められます。

従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもってバフマン・ザキプール氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断します。